

シリーズ・アクセサリー1

縄文時代の装身具



はじめに

1. 装身具の概要
第二の道具
2. 縄文時代の装身具
頭部 頸・胸部 腕部 腰・足部
3. 装身具を用いない装身
4. なぜ、装身具を身につけるか

装身具の概要 第二の道具

○装身具とは？

装飾の目的で身につける工芸品を
さす。いわゆる『アクセサリー』
(^{かんざし}簪・イヤリング・ネックレス
ブレスレット・指輪など)

○縄文時代の装身具

頭部の装身具

^{ひたい}額(髪)飾・^{かざり}笄・^{こうがい}簪・^{かんざし}櫛・^{くし}耳飾・^{みみかざり}仮面

頸・胸部の装身具

^{たれかざり}垂飾・^{くびかざり}頸飾

腕部の装身具

^{うで}腕輪・^わ指環

腰・足部の装身具

^{こしかざり}腰飾・^{あし}足輪



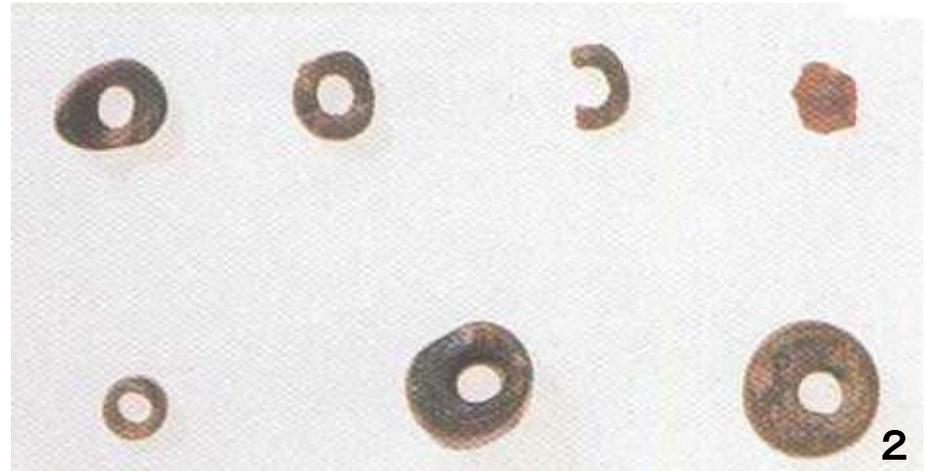
(晩期 宮城県田柄・里浜貝塚 東北歴史資料館)

ひたい

かざり

額(髪)飾 頭部の装身具

- ・ 円盤状のもので中央に孔(あな)が穿たれている。
- ・ 小玉とセットになるものであると考えられている。
- ・ 石製から土製へと素材が転換していき、土製のものは土器片の再利用。
- ・ 死者にもたせる装身具 → 「死後の装身」



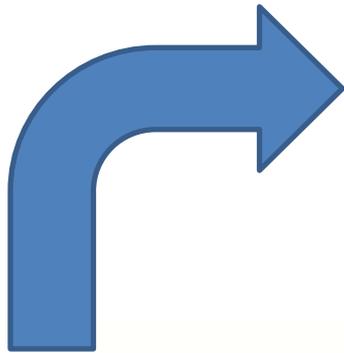
1. 石製円盤 (旧石器時代 三重県出張遺跡 大台町教育委員会)

2. 石製小玉 (旧石器時代 北海道美利河1遺跡 今金町教育委員会)

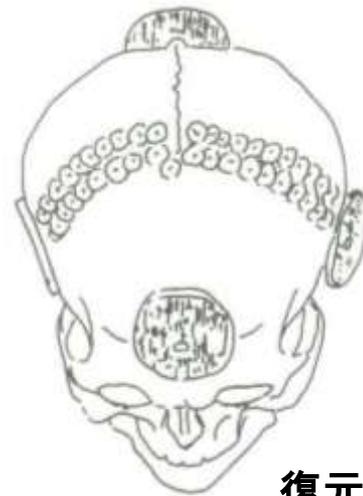
ひたい かざり
額(髪)飾 頭部の装身具

○額(髪)飾の出土例

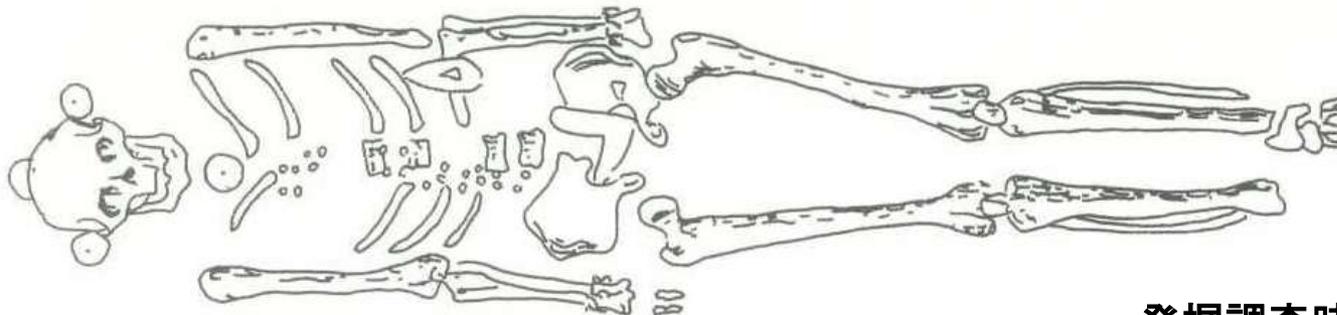
- ・ロシア レンコフカ1号墳墓の事例



復元



復元図



発掘調査時の図

こうがい かんざし

筭・簪 頭部の装身具

- ・ 先端が尖るものと篋状になるものの2形態がある。
- ・ 先端が尖るもの
 - └ 先端が1本で針状になるもの
 - └ 二股に分かれて双脚状になるもの(東北地方)
- ・ 素材は石・骨角
- ・ 頭髪を整える、飾る用途が想定される → 髪を結っていた可能性。
- ・ 男と女、生者と死者の明確な区別は見当たらず、一般的な装身具。



1. (晩期 宮城県沼津貝塚
東北大学考古学研究室)
2. (晩期 岩手県蒔前遺跡)
3. (晩期 宮城県沼津貝塚)



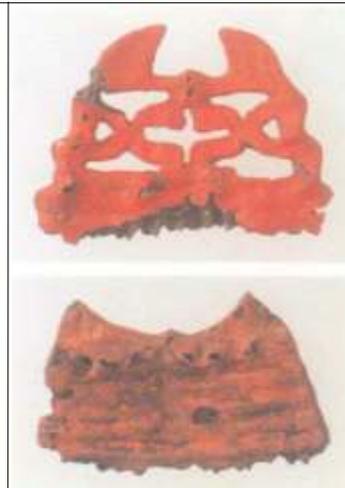
くし 櫛 頭部の装身具

- ・ 縦櫛（縦長）と横櫛（横長）の2形態に大別される。
- ・ 縦櫛 → 装飾性（縄文～古墳） 横櫛 → 実用性（古墳～現代）
- ・ 素材は木（漆塗）・骨・鹿角
- ・ 製作技法 縦櫛

└	刻歯式（一体型）
	結歯式（組み合わせ型）
- ・ 儀礼用、あるいは死後の装身。現在の櫛の用途とは異なる。



（晚期 埼玉県後谷遺跡 桶川市教育委員会）



（晚期 北海道御殿山遺跡 静内町教育委員会）



（前期 福井県鳥浜貝塚 福井県立若狭歴史民俗資料館）

みみ かざり

耳飾 頭部の装身具

○耳たぶにはさむ玦状耳飾と、耳たぶに嵌め込む耳飾(耳栓)がある。

○玦状耳飾

- 二個一対の意識が極めて強く出ている。
- 色彩の統一、造形の統一。
- 縄文時代前半に流行。
- 素材は石・土・骨角
- 死後の装身



(早期 神奈川県上浜田遺跡 神奈川県教育委員会)

○耳飾(耳栓)

- 二個一対の意識は希薄。
- 大きさの大小、装飾の粗密が見られる。
- 精巧な耳飾が登場する。
- 縄文時代後半に流行。
- 素材は土
- 生者の装身具



(晩期 群馬県千網谷戸
遺跡 桐生市教育委員会)

みみ かざり

耳飾 頭部の装身具

○北関東(群馬県)の出土事例



耳栓・滑車形耳飾 (晩期 群馬県茅野遺跡 榛東村耳飾り館)

仮面 頭部の装身具

- ・ 広義で装身具の一種。
- ・ 人面を簡略化したものから実用的・写実的なものへと変化していく。
- ・ 素材は土・貝
- ・ 表情の誇張表現と、対する表情を隠すための用途。
- ・ 祭祀、呪術の場で使用すると考えられている。



(中期 熊本県阿高遺跡
熊本市立熊本博物館)



(後期 埼玉県発戸 東京国立博物館)



(晩期 北海道ママチ遺跡 文化庁)

たれ かざり

くび かざり

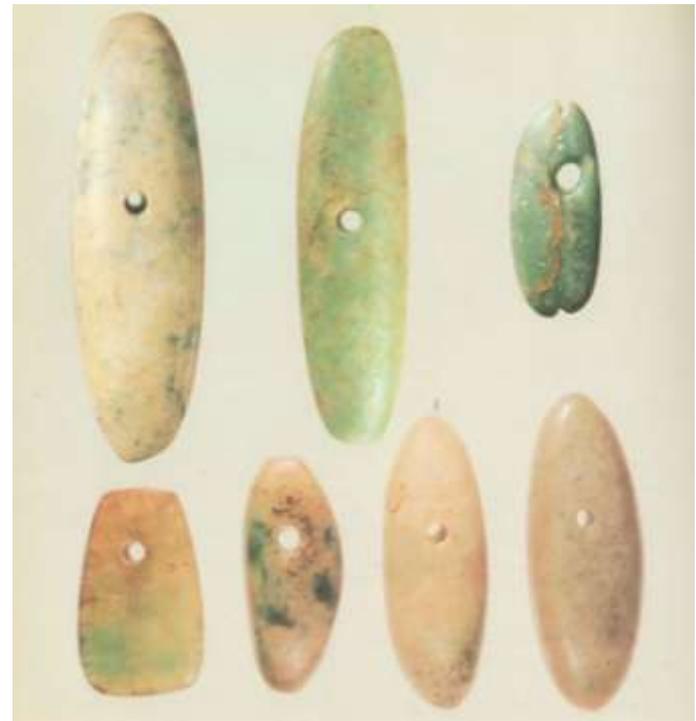
垂飾・頸飾 頸・胸部の装身具

- ・ 垂飾(ペンダント) → 一点豪華の美
- ・ 小さな貝や動物の牙から、光沢のある石材へと変化していく。
- ・ 硬玉(翡翠)製の大珠 → 希少な石材を用いる価値観 = ダイヤモンド
- ・ 素材は石・土・骨・貝

頸飾(ネックレス) → 相乗の美



(早期 長野県栃原岩陰遺跡 北相木村考古資料館)



(後期 福岡県山鹿貝塚 芦屋町教育委員会)

うで わ ゆび わ
腕輪・指環 腕部の装身具

○腕輪

- ・ 一体形と組み合わせ形の2形態がある。
- ・ 素材は石・土・木・植物繊維・牙・貝
- ・ 儀礼用あるいは、死後の装身。女性の遺体に伴う出土例が多い。

○指環

- ・ 東北地方・北陸地方で極少数発見されている。
- ・ 素材は石・骨角



(晩期 宮城県二月田貝塚 東北歴史資料館)



(晩期 青森県是川中居遺跡
八戸市縄文学習館)



(後期 千葉県吉作貝塚 東京大学総合研究資料館)

こし かざり

あし わ

腰飾・足輪 腰・足部の装身具

○腰飾

- ・ 鉤状の形態が多いが、形は多種多様である。
- ・ 素材は土・骨角
- ・ 祭祀・儀礼用あるいは、護符の用途。男性の遺体に伴う出土例が多い。

○足輪

- ・ 玉状形態のものが多く、死後の装身例が僅かに発見されている。
- ・ 素材は石・牙・貝



(中期 東京都檜原遺跡 東京国立博物館)



(晩期 宮城県里浜貝塚 辰馬考古資料館)

縄文時代の装身具

○装身具出土例と復元装身イメージ

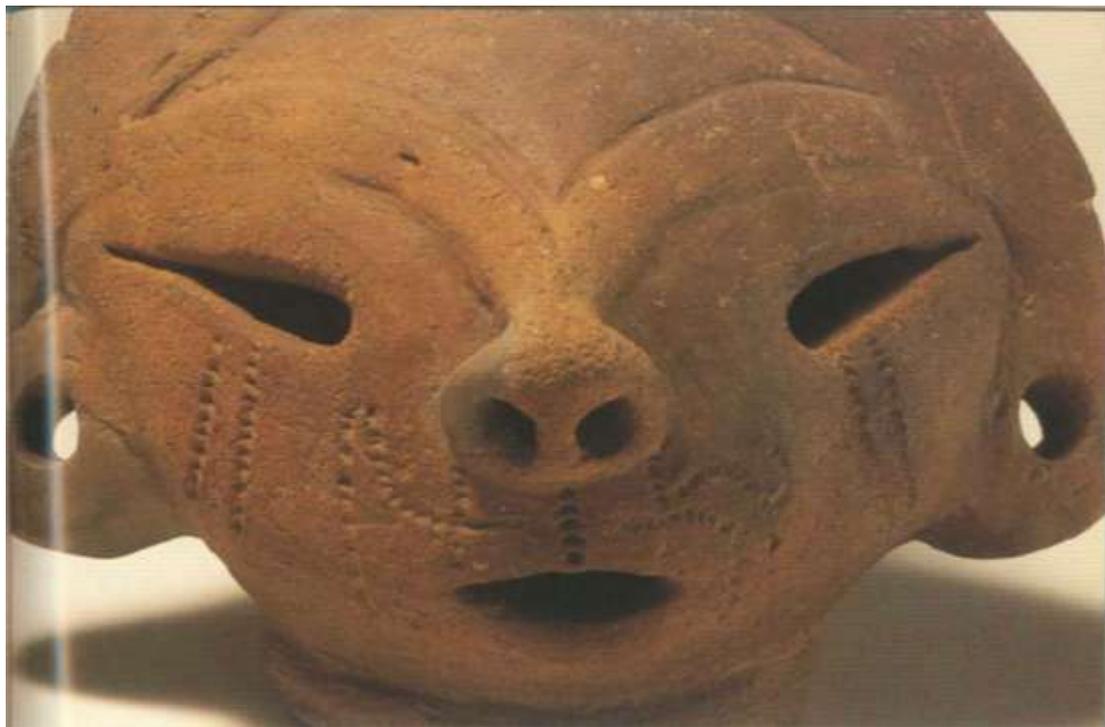
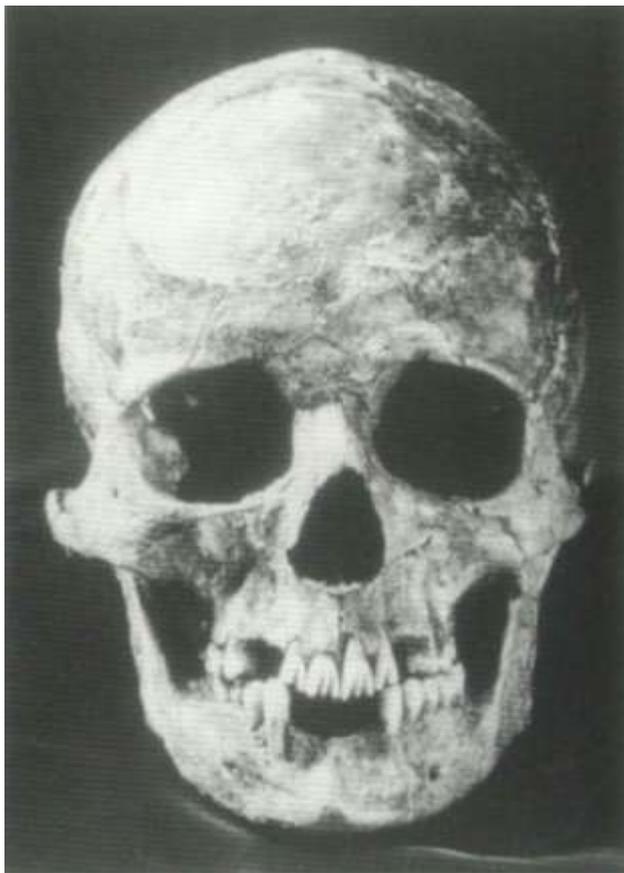


(後期 福岡県山鹿貝塚 芦屋町教育委員会)

(復元 新潟県十日町市立博物館)

装身具を用いない装身

ばっし さじょう けんし い ずみ
○抜歯・叉状研歯・入れ墨



土器把手
(中期 神奈川県横浜市栄区公田町 神奈川県立歴史博物館)

(晚期 愛知県伊川津遺跡 国立科学博物館)

なぜ、装身具を身につけるか

○装身具の性格

- 発掘調査における人間の着装したであろう装身具の発見対象は遺体に伴わない状態または、全て死者である。
- 死者の装身から読みとれる状況とは？
 1. 身につけていたもの(生前からの装身)
 2. 身につけていたもの(死後からの装身)
 3. 死者にもたせるもの(副葬品)
 4. 死者に供えるもの(副葬的装身具)

※多種多様な状況が存在しうる。



- 死者の装身から生者の装身を追究していく。
- 当時の造形物(土偶など)から、その時代の風俗を推察する。

なぜ、装身具を身につけるか

○装身の意義

- ・ 社会の発展段階において、その意義は変化する。
 - ・ 誇示、習俗、祭祀、呪術、儀礼、霊力、哀惜など。
- ↓
- ・ 他者との差別化、装身者自身の権威化。
- ↓
- ・ 装身を許される者が存在していたかどうかを追究していく。



縄文社会の復元的一端

おわりに

○参考・引用文献（*挿図・写真図版出典文献）

- ・岡村道雄 1993 「埋葬にかかわる遺物の出土状態からみた縄文時代の墓葬礼」『論苑考古学』 天山舎
- ・小林達雄 1989 『縄文のころとかたち〈縄文時代②〉 【日本のあけぼの】 3』 毎日新聞社
- *露木 宏 2008 『日本装身具史 - ジュエリーとアクセサリーの歩み』 美術出版社
- *土肥 孝 1997 『縄文時代の装身具 日本の美術No.369』 至文堂
- *春成秀爾 1997 『古代の装い 歴史発掘④』 講談社
- *町田 章 1979 『装身具 日本の原始美術⑨』 講談社